

## 「最低限こうでなくてはならない」自己と現実自己との不一致

—不快感との関連を中心に—

小平 英 志<sup>1)</sup>

我々は現実の自分のみをありのままに認識し、日々の生活を送っているわけではない。しばしば、自分が、行動の結果（現実の自分）を、目標となるような自分の姿と比較していることに気づく。また、自分のとる行動の決定にも、その目標となる自分の姿が影響していると認識できるときがある。必ずしも意識的にはないにしろ、人は、このような目標となる自己との対話を繰り返して自分を評価し、制御しながら日々を送っているのだと考えられる。

Higgins (1987) は、目標となる自分の姿を自己指針 (self-guide) と称し、その主要な領域として理想と義務の2つをあげ、理想自己と義務自己の弁別の重要性を指摘した。Higgins (1987) の提唱した self-discrepancy theory (以下SDT) によると、現実自己と理想自己との不一致、現実自己と義務自己との不一致が、それぞれ、落胆と関連した感情群 (失望、不満、悲しみなど)、動揺と関連した感情群 (恐怖、落ち着きのなさ、緊張など) を生じさせる。この2種類の感情群への傷つきやすさを説明する変数として、理想と義務という自己指針の種類が提起されている。

このSDTの中心的仮説、つまり自己不一致の種類と不快感との弁別的な関連については、日本でもいくつかの研究がなされている (例えば、小平, 1999; 工藤, 1990; 安田・佐藤, 2000)。しかしながら、必ずしも仮説を支持する結果を得た研究ばかりではない。特に、仮説を支持しない結果が得られた研究では、しばしば、SDTが想定する自己指針に関する、日米の文化差が指摘されている。例えば、工藤 (1990) は、現実-理想不一致の大小によって抑うつ得点に差異は見られなかった結果を受け、理想自己に対する希求に日米差がある可能性を指摘している。また、大学生を対象に、理想自己と義務自己の構成内容の比較を行った小平 (2000) では、義務自己の属性から「謙虚さ」という日本独自のカテゴ

リーが見いだされている。本研究では、SDTで想定される自己指針のうち、特に義務自己に注目し、以上の研究で示唆された「日本の文化に特有な部分」に焦点を当てた検討を行いたい。

これまで義務自己, ought self は「あるべき」状態を示す自己像として日本の研究に用いられてきている (例えば、石木, 1996; 小平, 1999, 2000)。しかしながら ought self と「あるべき」自己は完全に対応するものなのであろうか。oughtの語源はowe「所有する」である。現在では、oweは「責任を負う; to owe an obligation」という形で特殊化されて使用されている。元々oughtはこのoweの過去形である (研究社 1997 英語語源辞典)。一方「べき」はoughtと同様に助動詞であり、その終止形は「べし」である。これは義務及び行うのが当然であることを指す。漢字で表現すると「可し」であり、よろしい状態であると是認する意味、ほぼ確実に物事を予想している (きっとそうである) 状態を指す。以上の定義からは、oughtも「べき」も、ともに助動詞であり、同じように果たすべき義務を示していることがわかる。しかしながら、この2つの語は、「誰 (何) に対して果たすべき義務なのか」という点で異なる。そもそも英語のoughtは神の前の、1人の人間として果たすべき役割を示しているのに対して、日本語の「べき」はその義務を果たすべき具体的対象が浮かばない。あえてあげるのならば他者 (自分以外の人間) であろうか。特にキリスト教に代表される宗教的な価値観が普及している欧米社会においては、神の元に全ての人間が集い、その神の元に同じように存在するがゆえに自分と他者との関わりが生じる。そのような観点からは、他者との関係は神を経由した関係であると考えられることができる。一方、日本文化では、神という存在が自分と他者との間に介在することはなく、直接的な横の関係として考えられる。

このような文化による「義務」の微妙なニュアンスの違いについては、古くからベネディクト (1946) が「中国語、日本語にも英語の義務 (obligation) を意

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

味する様々な言葉が存在する。これらの言葉は完全な同意語でなく、それぞれが持っている特殊な意味はどうてい文字通り英語に翻訳できない”（長谷川訳，1972）と指摘している。それぞれの語源から考えると、日本人の考える義務自己（「こうあるべき」）と英語圏での ought self という概念は、完全には対応していない可能性が考えられる。しかしながら、これらの語源の違いをおさえつつ、義務自己を表現する言葉として「べき」ではなく、別の語を用いることによって、欧米の示す ought self のニュアンスに近づけることが可能なのではないだろうか。特に、前述の語源から、日本人は「べき」を自身の“社会的存在が脅かされないための基準”としてとらえる傾向にあり、ought の語源である、神前の1人の“人間として存在するための基準”という側面が弱められてしまっている可能性が考えられる。そこで、より人間的な存在として守るべき基準という意味を強調するために、禁止を強めた表現を用いることが有用なのではないかと予想される。

以上のことから、本研究では、従来から義務自己を表す日本語として用いられてきた「あるべき」と同時に、比較的英語の ought の意味に近いと思われる「最低限こうでなくてはいけない」という教示を用いて義務的な自己を測定する。その自己と現実自己との不一致と、その他の自己不一致との関連を検討するとともに、不快感情との関連についても検討を行う。本研究では、義務自己の他に取りあげる自己指針として、理想自己に加え、負の理想自己（遠藤，1992；Markus & Nurius, 1986）を取りあげる。負の理想自己とは、「こうありたくない」自己を指す。一見、負の理想自己は、「ありたいーありたくない」という理想的な次元に関する自己であるように見えるが、義務自己の一側面である、負の状態からの回避・予防という側面も持つと考えられる。しかしながら、これまでの研究において、負の理想自己は、義務自己と同時に取りあげられたことがなく、これらの関連は明らかにされていない。そこで、この負の理想自己と現実自己との不一致についてもあわせて検討を行う。また、不快感情として、落胆と関連した感情群に分類される「抑うつ」と、動揺と関連した感情群に分類される「対人的感受性」を取りあげる。

## 方法

調査対象 愛知県内の看護学校生82名（男子9名、女子73名、平均年齢22.7歳）を対象に調査を行った。

質問紙 ①自己不一致測定尺度 まず、「こうありたい」、「こうあるべき」、「最低限こうでなくてはいけない」、「こうありたくない」のそれぞれの自分の状態を想像す

るように求めた。さらにそれぞれの状態を表す言葉（以下、属性語と呼ぶ）を5つあげるように教示した。それぞれの属性語は「人間」という語が続くような形で回答するように求めた。続いて、それぞれの記述に対してどの程度実際（現実）の自分に当てはまるかを「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの5件法で評定するように求めた。水間（1998）ではいくつかの属性語を例としてあげ、その中から選んでもよいとの教示をし、理想の自分に関して10個の属性語をあげるように求めている。しかしながら、本研究では個性記述の方法の長所である、被調査者自身の自己の枠組みから自己不一致が測定可能な点を重視し、属性語例を被調査者に提示しなかった。また、本研究ではあげてもらった語をそれぞれ5つずつとしたため、比較的被調査者の負担は軽いものになったと考えられる。なお、記述が5つでも困難である被調査者もいることを考え、被調査者には、5つの記述が不可能な場合は5つより少なくともかまわないと伝えた。

② The Hopkins Symptom Checklist (HSCL, 15項目) 抑うつ、対人的感受性の測定のために、Derogatis, Lipman, Rickels, Uhlenhuth & Covi (1974) の作成した感情及びそれに関連する身体的症状を測定する尺度を用いた。実際には、HSCLの下位尺度のうち、Higgins (1987) が用いた2つの下位尺度、HSCL-D (depression, 8項目)、HSCL-I (interpersonal sensitivity, 7項目) を、小平 (1999) において日本語訳されたものを用いた。HSCL-Dは、臨床的な抑うつ症状に伴う広い意味での抑うつ状態を示す項目からなり、生きることへの関心の減少、動機づけの欠如、生命エネルギーの喪失といった状態を測定する尺度として定義されている。一方、HSCL-Iは、主に他者との比較における個人の無能感、劣等感、不快感の経験を示す項目からなり、対人関係における過度の自己意識や否定的予測を測定する尺度であるとされている。この2尺度のそれぞれの項目について、どの程度よく経験するかを「全くない」から「非常によくある」までの4件法で回答するように求めた。

手続き まず、被調査者に4種類の自己不一致を測定する質問票について4頁にわたって回答を求め、その後、HSCLへの回答を求めた。なお、最後のページに感想の欄を設け、意見・感想などがあれば、どんなことでもいいので書くようにと教示した。

調査時期 調査は1999年1月に行われた。

## 結果

抑うつ得点、対人的感受性得点の算出 まず HSCL

15項目について因子分析（主成分分解）を行った。固有値の減衰状況及び因子の解釈可能性から因子数を2とし、再び因子分析を行った（主成分分解, promax回転）。片方の因子に.50以上の負荷を示し、もう片方の因子への負荷量が.30未満であることを基準に、10項目を選択して再度因子分析を行った（Table 1）。第1因子に負荷の高い項目は、Derogatis et al. (1974)において、HSCL-Dの項目とされる5項目、HSCL-Iの項目とされる1項目であった。「将来に希望が持てない」「自分はひとりぼっちだと感じる」「自分の死について考える」などの項目で負荷が高く、1項目だけHSCL-Iの項目が第1因子に高い負荷を示したものの、全体的に身体・精神的エネルギーの低下を表す因子であると考えられた。よって、この因子は「抑うつ」の因子と解釈された。一方、第2因子は、「些細なことで傷つく」「衝動的な感情が抑えられない」「いろいろなことを自分の責任だと感じる」という項目で高い負荷が見られた。HSCL-Dの2項目がこの因子に高い負荷を示しているものの、この因子は、対人関係上のトラブルの予期や対人関係上での不快感を示す項目として解釈可能であった。従って第2因子を「対人的感受性」の因子とした。なお、10項目に

対する2因子の累積寄与率は46.88%であった。第1因子に負荷の高い7項目の合計を抑うつ得点（平均 12.60, 標準偏差 3.31,  $\alpha = .70$ ）、第2因子に負荷の高い4項目の合計を対人的感受性得点（平均 10.08, 標準偏差 2.42,  $\alpha = .72$ ）とした。

**不一致得点の算出** 自己不一致測定尺度については、全ての被調査者が各自己像で5個の記述を行っていたわけではなく、記述が4つ以下の被調査者が見られた。「こうありたい」「こうあるべき」「最低限こうでなくてはいいけない」「こうありたくない」のそれぞれの平均記述数は、それぞれ 4.77, 4.50, 4.35, 4.35であった。そこで、各属性語について「実際の自分に全く当てはまらない」に5点、「実際の自分に非常によく当てはまる」に1点を与え、その和をあげられた属性語数で割ったものを不一致得点とした。すなわち、不一致得点が高いほど、その自己像としてあげられた属性語に対して、実際の自分には当てはまらないと感じている傾向が強いことを示す。「こうありたい」自分に対する不一致得点を「ありたい」得点、「こうあるべき」自分に対する不一致得点を「あるべき」得点、「最低限こうでなくてはいいけない」自分に対する不一致得点を「いいけない」得点、

Table 1 HSCLの因子分析結果（主成分分解, promax回転）

	I	II	*
15 将来に希望がもてない	.73	.00	D
7 自分はひとりぼっちだと感じる	.67	.26	D
3 自分の死について考える	.63	-.10	D
10 物事に興味が湧かない	.63	-.17	D
14 自分は他の人たちよりも劣っていると感じる	.57	.10	I
4 自分は束縛されていて身動きがとれないと感じる	.50	.02	D
11 些細なことで傷つく	.02	.82	I
5 衝動的な感情が抑えられない	-.19	.73	I
6 いろいろなことを自分の責任だと感じる	.07	.72	D
9 いろいろなことを心配する	.04	.68	D
因子間相関			
	I	II	
I	—	.37	
II		—	

\*) IはHSCL-Iの項目、DはHSCL-Dの項目であることを示す。

Table 2 各不一致得点の基本統計量

	ありたい	あるべき	いいけない	ありたくない
平均	3.22	2.96	2.97	3.59
標準偏差	0.67	0.77	0.72	0.78
最小値	1.80	1.20	1.50	1.60
最大値	5.00	5.00	5.00	5.00
N	82	82	80	81

注) 各得点が高いほどその自己と現実自己との間に不一致を感じていることを示す。

「最低限こうでなくてはいけない」自己と現実自己との不一致

「こうありたくない」自分に対する不一致得点を「ありたくない」得点とした。各不一致得点の平均値及び標準偏差を Table 2 に示す。

4 種類の不一致得点の間に差があるかどうか検討するため、1 要因分散分析を行った。その際に、ポジティブな状態に対する不一致の程度（「ありたい」得点、「あるべき」得点、「いけない」得点）と、ネガティブな状態に対する一致の程度（「ありたくない」得点を逆転させた得点）は、単純に比較可能ではないと考えられた。そこで、「ありたくない」得点を除いた「ありたい」得点、「あるべき」得点、「いけない」得点の 3 得点間での平均の比較を行った。分散分析の結果、1%水準で有意 ( $F(2,158)=5.97, p<.01$ ) であることが確認された。続いて Tukey の HSD 法 ( $p<.05$ ) による多重比較を行った結果、「ありたい」得点と「あるべき」得点、「ありたい」得点と「いけない」得点の間に有意な差が認められた。「ありたい」得点は「あるべき」得点、「いけない」得点よりも高い傾向にあることが示された。

**不一致得点と抑うつ・対人的感受性との関連** 各自己像での不一致得点と抑うつ、対人的感受性得点との関連を検討するために Pearson の積率相関係数を求めた (Table 3)。まず、4 つの不一致得点すべての間に、有意もしくは有意傾向にある相関係数が得られた。特に、「ありたい」得点と「あるべき」得点、「ありたい」得点と「いけない」得点との間の相関係数がそれぞれ  $r=.50, r=.49$  であり (ともに  $p<.001$ )、他と比較して相対的に高い値を示していた。次いで「あるべき」得点と「いけない」得点との間の相関係数が  $r=.35$  ( $p<.01$ ) であった。また、「ありたくない」得点と「ありたい」得点と

の間 ( $r=-.29, p<.05$ )、「ありたくない」得点と「いけない」得点との間 ( $r=-.29, p<.01$ ) に有意な相関係数が得られた。「ありたくない」得点と「あるべき」得点との関連のみが有意傾向であったが、「ありたくない」得点とその他の不一致得点との相関係数は、有意であっても全て .30 に満たなかった。

不快感情との関連では、まず、2 種類の不快感情間に有意な相関関係 ( $r=.37, p<.001$ ) が見られた。抑うつ得点と不一致得点の間では、「ありたくない」得点 ( $r=-.25, p<.05$ ) が有意な負の相関係数を示し、「いけない」得点 ( $r=.21, p<.10$ ) との間の関連も有意傾向であった。一方、対人的感受性得点と有意もしくは有意傾向にある相関係数を示していたのは、「ありたい」得点 ( $r=.25, p<.05$ )、「いけない」得点 ( $r=.19, p<.10$ )、及び「ありたくない」得点 ( $r=-.24, p<.05$ ) であった。

さらに、Higgins (1987) と同様に、理想-現実不一致（「ありたい」得点）と義務-現実不一致（「あるべき」得点及び「いけない」得点）の相関関係が不快感情との関連に影響を与えていることを考慮して、どちらか一方の不一致を統制した偏相関係数を算出して、抑うつ、対人的感受性との関連を検討した。まず、「ありたい」得点と「あるべき」得点との間で、一方の得点を統制して抑うつ、対人的感受性との偏相関係数を求めた。次に、「ありたい」得点と「いけない」得点との間で、一方の得点を統制して抑うつ、対人的感受性得点との偏相関係数を求めた (Table 4)。結果、「あるべき」得点、「いけない」得点のどちらを統制した場合でも「ありたい」得点と対人的感受性との偏相関係数が有意もしくは有意

Table 3 不一致得点と抑うつ、対人的感受性得点との相関 (N=77)

	あるべき	いけない	ありたくない	抑うつ	対人的感受性
ありたい	.50***	.49***	-.29*	.13	.25*
あるべき	-	.35**	-.22 <sup>+</sup>	.12	.05
いけない		-	-.29**	.21 <sup>+</sup>	.19 <sup>+</sup>
ありたくない			-	-.25*	-.24*
抑うつ				-	.37***

<sup>+</sup>  $p<.10$  \*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$  \*\*\*  $p<.001$

Table 4 一方の不一致を統制後の偏相関係数

	ありたい	あるべき	ありたい	いけない
抑鬱	.07	.05	.06	.09
対人的感受性	.26*	-.09	.20 <sup>+</sup>	.05
統制された変数	あるべき	ありたい	いけない	ありたい
N	80	78	78	78

<sup>+</sup>  $p<.10$  \*  $p<.05$

傾向であった（それぞれ、 $r$ 「ありがたい」対人的感受性、「あるべき」 $=.26$ ,  $p<.05$ , 及び  $r$ 「ありがたい」対人的感受性、「いけない」 $=.20$ ,  $p<.10$ ）。「いけない」得点と対人的感受性、抑うつとの関連は、相関係数では有意傾向であったものの、「ありがたい」得点を統制した偏相関係数では、有意傾向にはならなかった。

**記述内容の検討** 各自己像としてどのような属性語が記述されたのかについて検討を行った。同じ内容であるが表記の仕方が異なるものを同一の表現に統一した（例えば「優しい」「他人に優しい」「優しくする」などを「優しい」に統一した）。Table 5 に各自己像で5人以上が記述をした語をあげる。「こうありたくない」自己については、対人関係に関する望ましくない状態が多く記述されているようであった。また、「こうあるべき」自己と「最低限こうでなくてはいけない」自己については、記述内容にさほど差がないように思われた。

## 考 察

本研究では、従来から「こうあるべき」と表現されてきた義務自己の教示に加えて、「最低限こうでなくてはいけない」という禁止の意味を強めた表現を用いて義務—現実不一致を測定した。また、「こうありがたい」（理想）自己、「こうはありたくない」（負の理想）自己についても現実自己との不一致を測定し、「最低限こうでなくて

はいけない」自己との比較を行った。また、それぞれの不一致と抑うつ傾向、対人的感受性傾向との関連について検証をおこなった。

### 1. 各不一致得点及び記述された語の比較から

まず、「ありたくない」得点を除いた3種類の不一致に関して、その平均値の差の検定を行った。結果、「あるべき」得点と「いけない」得点よりも「ありがたい」得点の方が有意に得点が高いことが明らかになった。また、「あるべき」得点と「いけない」得点の間には有意な差は見られなかった。従って、被調査者は、「こうあるべき」「最低限こうでなくてはいけない」自分の姿よりも「こうありがたい」自分の姿の方がより現実の自分には「当てはまらない」自己であると認識していることがわかる。この結果は、理想自己、義務自己の定義とも合致する。理想自己は現在の自分よりも高い水準に設定される基準であり、一方、義務自己は満たすべき最低基準であるとされる。義務自己の教示とされる「こうあるべき」と、本研究で用いられた禁止を強めた義務を示す「最低限こうでなくてはいけない」という教示は、理想自己の教示である「こうありがたい」よりも、満たしている（達成している）自己として評定されたものと考えられる。また、「こうあるべき」自己と「最低限こうでなくてはいけない」自己としてそれぞれ記述された語のうち、出

Table 5 それぞれの自己として記述された属性語（頻度5以上）

ありがたい		あるべき		いけない		ありたくない	
属性語	N %	属性語	N %	属性語	N %	属性語	N %
優しい	49 59.8	優しい	29 35.4	優しい	30 36.6	人を傷つける	24 29.3
素直な	17 20.7	時間を守る	21 25.6	強気	18 22.0	嘘をつく	22 26.8
思いやりのある	13 15.9	約束を守る	20 24.4	素直な	14 17.1	約束を守らない	11 13.4
お金持ちな	9 11.0	嘘をつかない	13 15.9	約束を守る	11 13.4	わがままな	9 11.0
信頼される	9 11.0	素直な	12 14.6	思いやりのある	11 13.4	迷惑をかける	8 9.8
一生懸命	7 8.5	思いやりのある	8 9.8	嘘をつかない	9 11.0	冷たい	6 7.3
頭の良い	7 8.5	正直	7 8.5	はっきりと主張で	7 8.5	時間を守らない	6 7.3
かわいい	7 8.5	自分に厳しい	7 8.5	元気	7 8.5	人を裏切る	5 6.1
明るい	6 7.3	真面目な	5 6.1	健康	6 7.3	自己中心的な	5 6.1
何でもできる	6 7.3	責任感のある	5 6.1	明るい	5 6.1	ケチな	5 6.1
熱心	6 7.3	はっきりと主張できる	5 6.1	一生懸命	5 6.1	弱い	5 6.1
真面目な	6 7.3	強い	5 6.1	真面目な	5 6.1		
楽しい	6 7.3			責任感のある	5 6.1		
心の大きな	6 7.3			無駄遣いをしない	5 6.1		
正直	5 6.1						
好かれる	5 6.1						
強い	5 6.1						
美しい	5 6.1						
合計	174	137	138	112			
記述の種類	173	184	162	189			
無記入	19	41	62	58			

現頻度の高い語を見る限り、さほど差がないように思われた。これらのことから、「最低限こうでなくてはいけない」という教示が、「こうあるべき」と同様に義務的な自己を表す表現として適当であることが示されたといえるのではないだろうか。日常生活に頻繁に用いられている「理想」という言葉については、その表現は多様であり、さまざまに換言可能である。一方、「義務」を示す表現は「こうあるべき」と表現されることがほとんどで、その他の表現を用いて示されることはあまりない。今後、「こうあるべき」と同時に「最低限こうでなくてはいけない」という表現を用いることによって、また、様々な表現との関連が明らかにされていくことによって、義務自己の概念をより明確にしてゆくことができるのではないだろうか。

4つの不一致得点間の関連を検討した結果からは、「ありたい」得点と「あるべき」得点との間の関連が最も高く、次いで「ありたい」得点と「いけない」得点との関連が強いことが明らかになった。これまでのSDTに関する研究の結果と同様に、理想-現実不一致と義務-現実不一致はやや高い相関関係にあることが示された。本研究では、より禁止を強めた「最低限こうでなくてはいけない」という義務自己の表現を用いたが、それほど、「こうありたい」自己の不一致との関連が弱まったわけではなかった。やはり、禁止を強めた表現を用いたとしても、この理想の状態に対する不一致と義務の状態に対する不一致は、被調査者にとって比較的高い相関関係にあるようである。

また、今回同時に取りあげた、負の理想自己を表す「こうありたくない」という自分の状態に関しては、現実自己との不一致を算出した場合、その他の不一致得点とは比較的低い相関関係であることが示された。このことは、「こうありたい」自分の状態に対する不一致（一致）の状態と「こうありたくない」状態に対する一致（不一致）の状態が正の相関関係にはあるものの、比較的関連が弱いということを示唆している。今後、「ありたくない」負の理想自己と理想自己、義務自己との関連に関してより詳細な検討が求められよう。

## 2. 不一致得点と抑うつ・対人的感受性との関連

不一致得点と抑うつ、対人的感受性との関連からは、まず、「ありたい」得点（理想-現実不一致）と対人的感受性の関連が有意であり、抑うつとの関連は有意ではなかった。また、「あるべき」得点是对人的感受性、抑うつともに有意な相関係数が得られなかった。そして「いけない」得点是对人的感受性、抑うつと有意傾向の関連にあった。有意傾向ではあるものの、「いけない」

得点と対人的感受性との関連は、Higgins (1987) の「義務-現実不一致と対人的感受性との関連」を支持するものである。しかしながら、SDTでは「ありたい」得点は抑うつのみに関連すると予測されるのに対して、本研究の結果からは、「いけない」得点と同様に対人的感受性得点のみと有意に関連していた。さらに、理想-現実不一致、義務-現実不一致のどちらかの得点を統制して対人的感受性、抑うつと偏相関係数を求めてみると、「ありたい」得点と対人的感受性得点との正の関連は依然見られるものの、「いけない」得点と対人的感受性得点との関連が有意ではなかった。従って、偏相関係数からは、「ありたい」得点と対人的感受性得点との関連のみが示唆されるにとどまった。これらのことから、本研究の結果は、Higgins (1987) のいう、理想-現実不一致と抑うつ、義務-現実不一致と対人的感受性との関連を支持するものではなかった。しかしながら、いけない得点と対人的感受性、抑うつとの関連が有意傾向であったことから、「最低限こうでなくてはいけない」自己からの不一致は、その個人の不快感情を喚起しうるような変数であると考えられた。このことから、「最低限こうでなくてはいけない」自己では、より“人間として存在するための基準”という意味合いを強めることができたと考えられる。

## 3. 理想自己と義務自己の弁別に関して

本研究では4つの自己の表現を用いて評定を求めたが、その中で、それぞれの状態を思い浮かべるのが非常に困難であったとの感想が被調査者の中で多かった。特に、「こうありたい」「こうあるべき」「最低限こうでなくてはいけない」の3つ自己を記述することに対して「どう違うのかわからないため」に困難であることが訴えられていた。この、感想部分に「理想自己と義務自己の違いがわからない」と報告する被調査者が多数確認されるのは、アメリカの大学生を対象として調査を行った Tangney, Niedenthal, Covert & Barlow (1998) でも報告されている。この理想自己と義務自己の弁別に関する問題に関しては、まず、2つの自己が異なる状態であると認識している被調査者とそうでない被調査者がそれぞれの程度の割合で存在するののかについて、明らかにしておく必要があるように思われる。この理想の状態と義務の状態との区別がっていない被調査者の存在は、理想の不一致、義務の不一致との間の中程度の相関関係にも反映されていると考えられる。本研究ではより禁止を強めた「最低限こうでなくてはいけない」という表現を加えて検討したものの、理想-現実不一致との相関係数は「こうあるべき」を用いたときとほぼ同じであった。

被調査者によっては、理想と義務という自己指針の区分がはっきりとなされていないことが考えられる。今後、この点を考慮した理論の再検討が必要であると考えられる。

### 引用文献

- ベネディクトR. 長谷川松治(訳) 1972 菊と刀：日本文化の型 社会思想社 (Benedict, R. 1946 *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture* Boston: Houghton Mifflin.)
- Derogatis, L.R., Lipman, R.S., Rickels, K., Uhlenhuth, E.H., & Covi, L. 1974 The Hopkins Symptom Checklist (HSCL): A self-report symptom inventory. *Behavioral Science*, 19, 1-15.
- 遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, 63, 214-217.
- Higgins, E.T. 1987 Self-Discrepancy: A theory relating Self and Affect *Psychological Review*, 94, 3, 319-340.
- 石木道世 1996 「こうあるべき」という意識と「こうありたい」という意識に関する一考察 日本教育心理学会発表論文集, 207.
- 小平英志 1999 諸自己像への accessibility と不快感との関連—Self-discrepancy theory の枠組みから— 教育心理学論集, 28, 9-17.

- 小平英志 2000 日本人にとって理想自己と義務自己はどのように異なる自己なのか —大学生が記述する属性語とカテゴリーの分析を通して— 性格心理学研究, 8, 113-124.
- 工藤恵理子 1990 現実自己, 理想自己, あるべき自己, なり得る自己とその達成感と抑鬱との関連について 日本心理学会第54回大会発表論文集, 186.
- Markus, H. & Nurius, P. 1986 Possible selves. *American Psychologist*, 41, 954-969.
- 水間玲子 1998 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究, 46, 131-141.
- Tangney, J.P., Niedenthal, P.M., Covert, M.V., & Barlow, D.H. 1998 Are shame and guilt relate to distinct self-discrepancies? A test of Higgins's (1987) hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 256-268.
- 安田朝子・佐藤徳 2000 非現実的な楽観傾向は本当に適応的といえるか —「抑圧型」における楽観傾向の問題点について— 教育心理学研究, 48, 203-214.

### 付 記

本稿は名古屋大学大学院教育学研究科に提出した修士論文(1999年度)の一部に加筆・修正したものである。なお、本研究の一部は日本教育心理学会第41回総会で発表された。

(2000年9月16日 受稿)

## ABSTRACT

The discrepancy between “saiteigenn-koudenakutehaikenai” self and actual self: relations to discomfort emotions.

Hideshi KODAIRA

In Japanese study about the self, “ought” in English has been translated into “kouarubeki” in Japanese. However “kouarubeki” self seems to be a self-representation to which one refers for maintaining one’s relations with others. In contrast, the word “ought” was originally used in the sense of a standard one should follow as a person under God. Therefore, in this study, “saiteigenn-koudenakutehaikenai” is take up as one statement describing the ought self, in order to enhance the nuance of forbidding. Japanese adolescents (N=82) participated this survey. The results showed that the discrepancy between the actual and the ideal self was significantly larger than the discrepancy between the actual and the “saiteigen-koudenakutehaikenai” self (A-SK), between the actual and the “kouarubeki” self (A-K). Interpersonal sensitivity related only the actual-ideal self-discrepancy, and, depression didn’t relate to any discrepancies. Although A-SK discrepancy didn’t have significant relationship with discomfort emotions, it was suggested that “saiteigenn-koudenakutehaikenai” self describe the ought self as well as “kouarubeki”self.

Key word : ought self, ideal self, self-discrepancy theory